

編集部 ●戦後五十年ということで、先の戦争に関して、僕らなりに総括するという意味で、あらゆる角度からいろいろ考えてみたいという思いがあります。

従軍慰安婦問題というのは、私自身もそうなんですが、どうしても一般に日本人には「あれはなかったことにおきたい」という思いがあつて、あからさまに大上段に構えて論じるというのはいけなく、したくない問題でもあるわけです。まず無意識のうちにそう考えてしまうということは、やはり日本人がやったことに対して、誰もいいことだとは思っていないということがあると思うんですね。また、従軍慰安婦問題は日本独特の問題なのかと考えた場合、そうではなくて世界各国に通底している問題ではないか。そうすると、それは軍隊と性の問題ということで考えていかなければいけないのではないかと思います。

ただ、軍隊と性についての一般論を論じるのではなく、日本の従軍慰安婦問題が、一つには韓国・朝鮮人の女性を強制連行したという事実が紛れもなくあるわけでして、その問題をどう考えたいのかということ、やはり僕ら自身がためらってしまうというか、ある種の後ろめたさ

罪深きは「男」か「戦争」か？

従軍慰安婦問題を考えるポイント

橋爪大三郎×瀬地山角 ●対談

もう一度言う。西尾幹二氏が見破ったように、ヴァイツェッカーの謝罪も戦略であった。エリツインの日本での謝罪も、したたかな計算によるものだった。レーガンの日系米人補償も、そうであった。断定する根拠はとばしいが、そのように見るほうが、人間的で自然な気がする。なぜなら、彼らは宗教家ではなく、政治家であるからだ。政治は道徳で動くのではない。常に、実利で動くことを考えれば、彼らは謝った「ふり」をした、と言ってさしつかえない。

日本が自らの植民地主義に対する謝罪を世界に向けて実行すれば、いつの日にか西洋に一撃を与えたいと願ってきた非西洋世界のかなわぬ夢を実現するさきがけの国として、日本は名誉ある地位を非西洋世界から獲得する。禍を転じれば、常に福がもたらされるのである。改めて大東亜の解放と、そして西洋文明を謝罪に追い込むために、一九九五年の敗戦の日に、日本人はみんなが十万円払おう。

を感じてしまうということがあると思います。たとえば西洋の軍隊、とくにアメリカの軍隊の場合は長期休暇をとらせる形で、性の処理というのは軍隊がかかわるのではなく、個人の問題として行われるわけなんですけど、そうするには日本はまだ貧乏だった、物質的にも精神的にも余裕がなかったということもあるのかもしれない。あるいは兵隊の管理はすべて、私生活までしなくちゃいけないということがあったのかもしれない。また占領地における性レイプの問題もあったらうし、性病の問題を管理するという形で、軍隊がそれを全部担ってしまったということがあります。

戦後一貫して、日本政府は国がかかわったことを認めず、あれは業者がやったことにすぎないという言い逃れをしてきたんですけれども、一九九一年にそれを認めざるをえない事実ができてきて、なんとかしなくちゃいけない状況が生まれてきました。しかし日本政府は、日韓基本条約において日韓の問題はすべて解決済みであり、それに対する国家補償は終わっている、個人補償はしたくてもできないんだという形で、一貫して言い続けてきたわけです。この問題を考えるときに、性の問題と、強制連行した国家意思の問題というものが大きいと思います。そのへんを論じていただきたいと考えております。

●国家意思の関与という事実

橋爪 ●従軍慰安婦の問題は、込み入った複雑な問題です。ですが、私からみて、おぞましいさまざまな問題のなかで、いちばんの問題がとりわけどこにあるかというと、ある人びとに売春をさせることを国家が命じて強制的にそれを行わせ、当事者たちはそれを拒否する術がなかった、と

いう点にあると思うんですね。国家が命じて売春を行わせた、つまりそこに国家意思が関与したという点、もつともスキャンダラスな点だとも思います。

国家がそういうことをやってもいいのだからとは、さすがに当時の大日本帝国の政府といえども考えていて、それを間接的な形にするようにいろいろな手を打ちました。実際には、業者が間に入り、業者が自発的に応募した女性を連れていくという体裁を取っているわけです。しかし、募集するときには詳しい事情を説明せず、現地の警察官や国の出先機関が関与して、いかにそこに国家意思が働いているかのような圧力をかけて、逃れようがない状況に追いこんで連れだした。実質的には、国家意思で連行する方針を、日本国政府がとっていたわけです。どこまでその証拠があるかという問題がありますが、これはどう考えても、やはり国家意思が関与していた事件であると考えざるべきである、考えざるをえないと思います。

●韓国・朝鮮人が役割を担ったという事実

橋爪 ●二番目の問題として、これももし、日本国政府が日本人に命じて従軍慰安婦にさせたのであれば、日本国政府の問題になるわけですが、朝鮮半島に居住していた人びとがとくに対象とされた。韓国・朝鮮人が主としてその役割を担われたという点、これと関連して問題になると思うんです。当時、韓国は日本に併合されて、日本の領土の一部であるということに、国際法上なっていた。韓国政府は存在せず、日本国政府の朝鮮総督府が統治権を握っていたわけです。ですから、もし韓国が法的な保護を求めようと思えば、日本国政府を頼る以外になかった。ところが、その日本国政府が当事者たちを保護するどころか、強制的に駆り立てて戦地に送りだし、

売春行為などをさせたという、ひどい問題なわけです。しかも、とくに韓国人の人びとだけが選ばれたわけで、これは日本人と韓国人という差別の問題になるわけです。日本人は、韓国人は日本の法律の下に置かれて当然という観念を持っていたからこそ、そういう選択ができたわけであって、このことの責任はまた重い。

●被害者に対する補償が放置された事実

橋爪●それから三番目に、この事実が認められ、謝罪がなされて、被害者に対する権利の回復や補償が直ちにされるべきだったわけですが、半世紀も放置されてきたという点が問題ですね。大日本帝国政府そのものは解体してしまいましたが、その正統な後継政府が存在するわけで、これは、連合軍の占領下にあった日本国政府、そして、独立を回復した後の日本国政府です。これでも、日本の正統な政府であるというならば、大日本帝国政府が諸外国や統治下の人民に対して行ったさまざまな出来事について、当然責任を負うべきである。もしその事実を認めず、その責任をとらないとしたならば、日本国政府と戦後民主主義の正統性それ自身が、内外から疑われるのです。今、まさにこれが疑われているわけですから、その意味で、非常に大きなスキャンダルであると言わなければなりません。

個人史に立ち入ってみれば、被害者一人ひとりに苦難に満ちた人生を送らせてしまったことは何ともとりかえしのつかないことですが、もしこれを大きな枠組みのなかで議論するとすれば、それを国家が意思で行ってしまったという点に求められるのではないかと、まず思うわけです。

●日本人のなかにある外国人「差別」意識

瀬地山●国家の責任というのは、ほとんど私の感覚でいうと、あまりに自明で、そんなことを未だに言わなくてはならないことにむしろ驚きをおぼえます。国民のなかでは国の責任を意識している人たちは、かなり多いはずなんです。それにもかかわらず一連の政治家の無責任な発言がでてきて、不戦決議なども骨抜きの状態になってしまっている。そのなかで、今おっしゃった一番目、二番目の問題というのは、ある意味では問題としては非常に単純で、もうとうの昔に片づいていていい問題なのではないかという気がするんですけどね。私は、そこは学問的な意味ではもう論点にならないぐらい自明なのじゃないかというふうに思うんですけどね。

橋爪●自明ではないと、私は思います。

自明であるとは、利害関係にある当事者がすべて納得して、問題が解決したという意味ですね。しかし、たとえば台湾から日本軍に参加した軍人の恩給の問題、郵便貯金の問題、香港や各地の軍票の問題など、さまざまな問題は全部未解決なんです。そしてその元をたどっていくと、日本が固有の領土を拡げていった歴史がある。同時に当然、住民も増えていきました。その人たちが、大日本帝国の下で正当な権利を持たなかったという点が根本にあるんじゃないかと思うんです。

それから、日本国民の間にも内地人と外地人という意識があって、外地人は日本でなくなっても当たり前。内地人がそこそ日本で暮らしていければ、外地人のことはだんだん忘れられても当然みたいな意識がどこかにある。そういうことが、やはり問題のおおもとにあるわけです。厚

生省や外務省の役人が敗戦処理の問題で冷たい態度をとるわけですが、彼らの反応のおおもとをとると、やはりそういう意識にたどりつく。それはすべての日本国民のなかにもある。それをどう克服するかがはつきりしないかぎり、当たり前とは言えないんじゃないかと。

瀬地山●東京裁判に関して、橋爪さんがおっしゃったことは、そういう意味では、非常に重要な点で、つまり外国ではなかった分だけ保護されない、誰もバックアップする勢力がいなくなってしまうというの、韓国や台湾のいちゃんの悲劇なのでしょう。それと同じような意味で、やはり在日朝鮮人・韓国人の問題というのが、戦後完全に「日本国民じゃない」という形で切り取られていきますよね。在日というのは日本人ではないのだという形で、問題のなからすべて切り取られる。スタートとしてはまったく同じような構造をとった一連の問題群だったのだと言えます。

●政府のいう「解決済み」とはどういうことか

橋爪●戦争のなかで、人権が踏みこまれていく人たちは大勢いるわけです。このことは、戦争の持つ、避けがたい宿命のようなものかもしれない。ただ、それに対して最大限それを補償する措置が、できれば戦争の最中、少なくとも戦争が終わってからのなされなければならぬわけですね。日本は敗戦国ですね。そこで、戦勝国との間の平和条約（戦争責任については東京裁判）というかたちで解決が図られたと思うんですけども、中国やオランダ（やはり従軍慰安婦問題に少しからんでいる国ですけれども）は戦勝国であつたので、少なくともこの問題をその場で提起する可能性があった。ですけど、どちらも韓国の従軍慰安婦に比べて数が少なかったうえ、今後の

対日関係に政治的な配慮を加えたのかもしれないですけど、これが大きな争点になることはなかったと思うわけです。

韓国の場合は、独立していなかったために、戦勝国でもないし、敗戦国とも言えない、日本政府に対してまことに微妙な立場になりました。ポツダム宣言のなかに「朝鮮半島が日本の固有の領土でなくなる」という一項が入っていました。ポツダム宣言を受諾した段階で、日本は統治権を失ったわけです。では、韓国は、どの時点で独立を達成したのか？ どの政府が韓国の独立を達成したのか？

八月十五日の光復節の段階で、韓国はいわば真空状態だったわけです。それで、アメリカとソ連が別々に朝鮮半島に入り、軍事占領を行って、彼らが統治権を代行した。その後、正統な政府がでてくるはずだったんですけど、ご存じのように半島全体にわたる正統な政府というのができないで、分裂国家のまま現在に至っているわけです。

日本政府は、本来なら朝鮮半島全体を代表する正統な政府ができた段階で、朝鮮半島の人びとと日本国政府との関係を確定するはずだったんですけど、これができないまま二十年近くが経過したので、とりあえず南の大韓民国との間で一九六五年に日韓条約というものを結ぶ。このなかで、さっき問題になったような賠償請求権の放棄ということがあったわけです。これは、戦勝国であった中華民国（台湾政府）、それから同じく戦勝国の中華人民共和国（これは成立が終戦より後なんですけれども、国共合作のもと共産党軍は日本と戦っていましたから、戦勝国の位置にあると思われるんですけど）の日中平和友好条約、これらとだいたい匹敵するものだと思うんですけど、賠償請求放棄の条項が入っていました。これを根拠に、日本政府は「問題解決済み」の

態度をとっているわけです。いっぽう、北朝鮮との間では、まったく未解決の問題として残っているというわけです。

編集部●そうしますと、まさに国家の問題としては解決済みである。そのため、元従軍慰安婦が個人的に補償を求めていくという動きがありますが、それに関しては日本はそっけない形で、常に拒否をしてきました。今、村山政権がやっているのは、民間の資金を以てそれに代えようとしていることで、それには反対運動が起こっていて、お金の補償というよりも日本国に、自分たちは過ちを犯したということをはっきり謝罪してほしいというふうに言っているわけです。ほんとにそういうふうにとただ単純に考えていいのかどうかという複雑な問題がありますね。

橋爪●いろいろな運動が起こって当然だと思っただけで、韓国の方々は、そういう運動を起こすだけの正当な理由があると思うんですよ。そしてそれは、私たちがその運動に応じて何かの行動を起こす場合の理由とまったく同じである必要はないと思うんです。韓国の方々は、たとえば韓国のナショナリズムに基づいて運動を起こすかも知れない。それから韓国のフェミニズムに基づいて運動を起こすかも知れない。それから、宗教的な正義感に基づいて運動を起こすかも知れない。そういう立場であっても、運動を起こすのはまったく自由だし、それは日本のブラスにもなると思うんです。なぜならばそれは、さまざまな角度から日本の過去の責任を明らかにすることですから。

●日本がとるべき正しい態度とは

橋爪●私たちが、その提起を受け止めて適切に行動しようと思えば、それはやはりまず事実関係

を究明して、どういう事柄が起こったのか、とくにそこに日本の国家意思がどういう形で関与したのかを、よくたしかめることではないかと思えます。次に、日本の国家意思が関与した程度に応じて、それを現在の日本国の責任として受け止めることではないかと思えます。そして三番目に、日本国の責任をどのような形で表明すればいいのかということについて、当事者の理解がえられ、国際社会の常識にも合致するようないまい手だてを考えて、それを追求していくことじゃないかと思うんですね。

それが、個人補償という形になるのかどうか、私はよくわかりませんが、とりあえず、まず日本国政府の名前で謝罪する必要があるというところは、明らかではないかと私は思います。

瀬地山●韓国あるいは中国の側から日本、とりわけ日本に関する報道を見ると、非常にイライラするんですね。一連の発言もそうですし、国会決議もそうです。ちょっと細かい問題なのですが、たとえば「謝罪」というもの一つにしても、「遺憾の意を表する」という言葉で謝罪をしたようなことになっていますね。田中訪中のときにも「迷惑をかけた」という表現が問題になりましたが、やはりいずれの国も非常に直截な表現をつかう文化の社会ですので、謝るというのは「申し訳ございませんでした」ときちんと言わなければいけないと思うんです。

日本の国会での官僚の答弁のような回りくどい表現は、日本の国内ではある程度通用するのかもしれませんが、韓国や中国の報道をおして見ていると、本当に謝る気があるのかどうか疑わしいようなものに聞こえてしまう。そのうえに、不意な発言が繰り返されるので、いつまでたっても信頼関係が築けない。

謝るのですから、もっと相手の文化を意識する必要があると私は思います。たとえばアメリカ

が日本的な「気配り」を理解しないということについては、われわれはよく認識をしているのに、韓国や中国に関しては、そうした文化的ギャップについてはほとんど無知に近い。こんなに近くにいる、人の往来も激しいのに、お互いの行動様式や文化的なコードが違うということにさえ、あまり認識がいていない。こうしたことも一つの背景になっていると私は思えるのです。

橋爪●謝る場合に、相手の文化に配慮するというのは当然なことですが、国際基準に従って謝ればそれで必要かつ十分じゃないかと私は思います。日本の謝り方が足りないという点、私もまったく同じ意見です。「謝れ」と言われたから謝るという日本の文化があって、「謝れ」と言われると謝ってしまうんですが、「謝れ」と言われても謝る理由がないときには謝ってはいけません。逆に、謝る必要があれば何も言われなくても謝る。謝るからには、どれだけの罪咎が自分にあるかという事実関係をたしかめて、「多くの人が」と言って済ませるところを、たとえば「何十万何千何百の方々が」というふうに言い、そして「迷惑をかけた」とか言わないで、「亡くなった方が何人、外地で戻れなかった方が何人、戻ったけれどもこういうふうな目に遇われた方が何人」と言わなければ駄目なんですよ。それをした後であれば、言いまわしは、「ごめんなさい」でも、「遺憾です」でも大した違いなしに通じるんじゃないかと、私は思います。

瀬地山●「ごめんなさい」というのをききんと言わなければならないか、本当に頭を下げて。その意味では国際的な基準にも達していないと思います。日本的な言いまわしというのは日本のローカルルールでしかないのですから。もちろん、データとしてききんとしたものをだしてくるというのは当然なのですから。

橋爪●少なくとも、政府の首脳が謝るについては、その謝る理由を国民に説明して、「こういう

事実がありました」と、国民にまず訴えかける。そして、国民が「なるほど、そんなにひどいことをしていたのか」とわかった段階ではじめて、政府の首脳が国民を代表して相手国に謝ることになるわけですよ。でも、そんなプロセスはいつもぜんぜんないんですよ。こういうプロセスなしに謝り方の表現や言いまわしみたいなことに問題を収斂させていくと、問題が矮小化されてしまうと思うんです。

●当時の政策の合理性の間違いを認識しなければ、過ちは繰り返される

編集部●そうすると、まず日本国政府がやるべきことは、どんなことがあったのかを明らかにすること。ということがいちばん大きいということですか。

橋爪●そうですね。しかし、当時の政策がなぜとられたかという点、当時には当時なりの合理性というものがあるわけですよ。その政策は無鉄砲にとられたわけではない。その合理性そのものが誤った合理性なわけですから、そこもよく考えていかないといいけないですね。

そこで、まずどうしてそういう合理性が信じられたのかというふうに考えてみると、兵士を管理しなければならぬという強い要求が、軍隊の伝統としてあったらと思う。管理にはいくつかの面がありますが、たとえば、強姦を防止する、戦場の混乱を防ぐといった意味があります。それから、性病を管理するという面もあります。これらはじつは、国内で、普通の日本国民に対して考えられていたこととよく似ている気がします。当時は公娼制度をとっていましたから、特定の場所に娼妓が集められていて、鑑札をもって営業していた。内務省の管轄下で、定期的な健康診断や身分の登録が義務づけられていた。それと同じような考え方なんです。

なぜそういう政策をとったかという、男性というものはある程度コントロールを外れる可能性がある、こういう場所を用意しておかないと治安が維持できないとか、一般の婦女子に迷惑がかかるか、性病が管理できなくなるとか、そういう論理だったわけですね。ましていわんやそれが、徴兵された男性単身者の集団である軍隊ともなれば、その必要がさらに強くなるだろうと、その論理を進めていけば、軍隊の首脳が考える構造になっているわけですね。

では、そういう前提があるとして、どう解決するか。もしこの目的のために日本の不特定多数の若い婦女子をくじ引きかなんかで集めるとしたならば、そもそもこの戦争の戦争目的に関する深刻な疑問が生まれてしまうだろうと思います。それはできないことだったんですね。日本という一つの内なる社会があるとすると、そのなかで一般の婦女子にそういうことをすることはできない。これは当然、考慮から排除された。もう一つ真剣に考慮されたのは、日本の、いわゆる芸妓・娼妓と言われる人たち、つまり水商売の人々を連れていくということでしたが、性病を管理するという問題からいって、きわめて不適当だということが証明された。

そこで、その二つのどちらでもなく、格好のターゲットとして狙われたのが韓国の未婚の女性たちだった。韓国は儒教文化の伝統が強かったので、貞節観念が堅くて、性病に罹患している可能性がほとんどゼロであった。きわめて高い道徳性がまずあてにできた。それから、日本人ではない。ここが重要だったわけですが、これを行っても日本のアイデンティティに傷をつけないというふうに、日本の陸軍は判断したんでしょう。それで彼女らをターゲットにすることにしました。これは、たいへんなスキャンダルだと思えますけれども、こんなことがまともな合理的な政策として考えられたということが、まず確認すべき非常に重要な事実だと思えます。

そういうふうに考えたことの、どこがどう間違っているかをよく認識しないのであれば、また同じことを考える可能性がありますね。

●日本とナチス・ドイツは同一に論じられるか

編集部●ナチス・ドイツも同じようなことをしていたというものでてきていますね。

橋爪●それは、どんなことでしょうか。

編集部●フランス、ポーランド、ソ連占領地域において、軍が女性たちを強制収容したと言われている。今までは「日本人だけがやってきた」と言われてきたんですが、意外とこれは世界各国にあることではないかと思うんですが。

橋爪●それは、性質がずいぶん違うと思いますね。なぜならば、東ヨーロッパはドイツの占領地でしょうか。占領地であればドイツの国内法は適用されないでしょうか。国内法が適用されないければ、ナチスの陸軍の、行政命令でもって何でもできる。だから、それは合法的なんです。実際に行われたことは非常にひどい話だけれども、事情が違います。

日本の場合、国内でしょうか。しかも平時でしょう、戦時じゃなくて。軍の責任ではなくて、通常の法律下にある、日本国政府のストレートな責任なんです。外地で軍隊が何をしても、それが直接ドイツ政府の責任にはならない。間接的な責任です。日本の場合、それが政府の責任になり、国民の責任になるのです。だからといって、私はナチスを免罪しようと言っているんじゃないんですけれども、「ナチスもやってくるから」とかいう問題じゃないと思います。日本のほうがもっと深刻なのは、平時に国内で起こっているという点ですね。

●強制か、自由意思か

編集部●渡部昇一さんは「駆りだされた」のではなく、あくまで募集したことを強調しますね。昭和十九年（一九四四）の『朝日新聞』に広告がでていた。「応募して、それ相応のお金を貰って、国に帰って家を建てたじゃないか。だから文句ないだろう。当時作家の中島敦が東大を出て、女学校の先生になったときの給料は六十円であり、それを彼女たちは一日で稼いだんだから」という言い方を、大雑把になさるんですが、ちょっとそれは、ただじゃない。

橋爪●それには異議があります。「自発的に応募」できたかどうか、この一点にかかると。もし、まったく軍隊や国家意思も関与せず、自由な応募を募ったと、そして応募者がたくさんあってこのような従軍慰安婦の組織が出来上がり、しかもいわゆる相場場で支払われたとするならば、けっして誉められたことではないけれども、ここまでのスキャンダルではないです。それなら渡部さんの理屈も成り立ちます。

瀬地山●あまりにも事実と反するという気がしますね。どこの資料を以てそういうことを渡部さんがおっしゃったのかは知りませんが、今まででできた証言から見ると、「引っ張っていかれた」というのはいろいろなところででてきているわけですし。ちょっとそれを前提にというのは……。

橋爪●もし根拠を探すとすると、形式的に「応募の同意書があるではないか」という、そのレベルになると思えます。そのレベルでしか議論しないとしたら、やっぱり無責任です。ね。実質的な同意でも何でもなかったという証拠は、山ほどあるわけだから。それを知らずながら今の

ような言説を振りまいているのだとしたら、国民を愚弄するものです。

瀬地山●それともう一つ、当時の朝鮮社会のなかで自発的に応募する人がいたとは、とうてい思えないです。

橋爪●なぜなら、日本よりも、はるかにはるかに道徳的な国ですからね。

編集部●逆に言うと、強制されたんだけれども、戦後その事実を隠さないと生きていけないという社会でも、またありますよ。

橋爪●そのとおりです。

編集部●だからこそ事実がでてこなかった。でも、現実には、ようやく四十何年たって「こういうのがあった」と。公然と顔をだして、「自分がそうだった」と語るといことは、もって重い事実ですよ。

橋爪●従軍慰安婦として過ごした何年間と、それが済んで韓国社会に戻って、それからその事実を隠して（隠しきれないものではないと思いますけれども）、いわば自分の人生をなくしてしまっている半世紀とを比べるならば、どちらが重いとは言えないけれども、その半世紀のほうがむしろ悲惨であったと言いうこともできる。そのことは、日本国政府や日本軍が意図したことではないと思いますけれども、しかし十分に予想できることだったと考えるべきですね。

もちろん、日本は勝つつもりで戦争したとも言えるわけだから、負けてしまっただけで、韓国が独立して、韓国社会がそのように、その女性を遇するだろうということは、想像力のない日本人であればぜんぜん思いもつかなかったかもしれないんですが、そこはよく考えてみればいいんですけれども、もともと性病が少ないと考えられた理由は、韓国社会が道徳的にきわめて高いレベルにある

ったからでしょう。そういう女性たちを連れて行って、売春に従事させれば、その道徳性の高い社会で受け入れられなくなるということは、当然です。そのことに關しても、やはり責任があると考えべきです。

韓国社会が、その女性たちを受け入れなかったというのは、その社会の固有の文化なんだから仕方ない反応だと思ふ。それが正しいとか正しくないとか判断する権限は、私たちにはない。それは、韓国社会の問題です。ただ、私たちは、韓国社会がそういう社会だということを知らないから、そこから若い女性を無理やり連れてきたわけですから、その後に関することに関しても、当然責任があると考えべきなのです。

●「民族」と「性」という二つの変数

瀬地山●日本の責任という意味では、まったくおっしゃる通りだと思います。それはそのとおりですし、韓国社会の規範の問題を、こちらから問題にすべきではないというのは、ある種の文化相対主義としては、そのとおりなのだろうと思うのですけれども、先ほどの三番目の問題についてあえてもう少し言っておきたい。韓国では「従軍慰安婦」という言葉ではなく、「挺身隊」という言葉が普通に使われています。これは募集のときに「挺身隊」という言葉が用いられたためでもあるのですが、勤労挺身隊の問題と、いわゆる従軍慰安婦の問題とがごっちゃになってしまっているんですね。勤労挺身隊の話はあまりされずに、ですから、勤労挺身隊の話も含めて、なぜか従軍慰安婦の問題に収斂されるような形で問題が論じられたりするんです。

そういうふうなすることによって、従軍慰安婦の性格について直截に言及することをさげよう

としたということもからんでいるのですが、民族と性という、二つの変数が問題になっているときに、韓国社会の問題にするしかたというのが、やっぱり民族というのにずっと引きずられていったという印象がぬぐえないのです。そこで、性という問題が、韓国社会のなかでは運動のレベルで、あまり注目されずに残ってしまうという構図があつて……。

フェミニズムの側からみると、もう少しそこを問題にしなければいけないのではないのか、つまり日本という問題とは別に、フェミニズムでは問題にしなければいけない部分もあるのではないかとふうには思ふんですけどね。今こういうことを言うと、日本の責任を免罪するような言説になってしまうので、それが非常に言いにくいし、私も言いたくないということがあつて、それで韓国国内の議論をみているときに、非常に複雑な心境になってしまふんです。

橋爪●今の問題と同じことかどうかは知らないけど、その状況を私なりに整理すると、まず従軍慰安婦になって帰国した女性は、韓国の基準からみると「本人に責任がある」と判定されてしまふ本人が人間存在としての価値を失ってしまったというふうにみられてしまふ文脈があるわけですね。

瀬地山●ええ。

橋爪●私からみれば、これが日本の国家意思による出来事であれば、そこに本人の意思は關与してないわけですよ。本人は、まったくやむを得ずそういうことになったわけではないですか。それなら、それは本人の責任ではないんですから、本人は何も悪くない。これが、近代のロジックだと思ふ。しかし、そういうロジックにならない分だけ、韓国ではその女性本人に対する追及と

本人の苦難は、もうちょっと楽だつたらうになあ、と。これは、ちょっと評論家的に言えることです。

だけど、さっき言ったように、その差別を含めて、それを生みだした第一原因が日本にあるというふうには考えないといけない。それをすつとばして韓国の文化の問題として語るのはいくらも思ひます。

瀬地山●おっしゃる通りですが、「韓国にかかわる」という意識を持つ人間としては、敢えてもう一歩言っておきたい。友人のたくさん韓国人たちとずっと本音のつきあいをしたいと思うから。この問題について日本の側が一義的に責を負うべきなのは自明です。私にとっては、当然の前提です。それが政治家たちの変な発言によって、ちっとも自明の了解とならないことが、最大の問題なのですが、問題は百パーセント日本の側にあるわけでは必ずしもない。日本のきちんとした謝罪がすんだあとにも、韓国側の問題というのが残っている。もちろんそれは、日本の責任が八割で、韓国側が二割というような種類の問題なのだけれども、韓国側の対応についても、日韓関係のためにはよくないと思ふことが少なくない。それはこの従軍慰安婦問題でも同じです。私は単なる嫌韓論をおおる保守主義者とはまったく違う意味で、それを悲しいことだと思ふし、そのことに関して韓国人たちと腹を割って話をしたい。僕たちの対応が未だに五十年前の問題を清算できていないことは、まったく僕たちの責任だけれど、それを認めた上で君にも責任の一部はあるのだという議論がしたい。私はいつもソウルのボジヤンマチャ（屋台）で、焼酎を飲みながらそんな議論をしていたんです。でもそれをするまでの前提となるべき、日本の責任というのがまだ自明の了解になっていない。だからこそ一連の保守政治家の発言に私はものすごく

らだつんです。

つまり民族と性という二つの次元があるときに、いつまでたっても問題が民族の話に収斂してしまう。

橋爪●実際問題として、まず結婚できませんよね。

瀬地山●そうである場合が多いです。隠して結婚されているケースが、ないわけではないですけど、橋爪●隠して結婚すれば、逆に今度は抗議の声があげられなくなる。いずれにしても、自分の人生の一部分を失ってしまうわけですよ。

こういう事柄に対して、補償というのが正しい方法なのかどうか。補償はすべきだと、私は思うけれど、補償すればいいという問題じゃないと思ふんです。この二点について、何かお考えはありますか？

瀬地山●問題が補償ではないというのは、基本的にはそのとおりで、やはり先ほどの議論と同じなのですけれども、きちんとした謝り方が今まで一度もできなかったというのが、いちばんのポイントで、差し当たりそれ以上のこういうものに関する清算の仕方というのはないんじゃないのかと思ひます。国民に説明しなかったというのも含めて……。

編集部●これは日本が初めて直面した問題であります。今までの歴史においてはこのような問題はあったのだろうか。歴史に学ぶとするならば、そういうものがあつたのかどうかということはどうでしょう。たしかに、「いいことをした」とは誰も思つてないですよ。そのときに、責任、謝罪というのはどういう形で行えばいいのかというのが、先例がないわけですから、正直なところよくわからないのですが。

橋爪●あまり考えを詰めていないのですけれど、まずそれは、国家がやることとそうでないこととに分かれるんじゃないでしょうか。たとえば、軍隊が国家の命令で作戦行動をとって、集まって、進軍したりしますね。国内にいる間は、基地とか軍事施設のなかでは軍法が通用するし、一歩外へでれば普通の市民法が成立しますから、そのどちらかの法律によってコントロールされるわけです。だとしたら、強制的に売春婦になるなんてことはあり得ようがないわけですね。だから、それは「軍が関与しないで民間が勝手にやっつて」という言い方ができるのだし、実態としてもそれに近いんじゃないかと思うんですね。公娼制度を別にすると。

いっぽう外国では、自国の法律は適用されない。自国の売春関係の人々はビザも取れないし、外国にも行けないわけです。そうすると、軍隊はそうした女性と隔離されざるをえない。

アメリカの場合、それを現地のシステムで代行させるんじゃないかと思えます。たとえばベトナムならベトナムでそういう施設は少なかつたかもしれないけれども、アメリカがドルを落とすとそういうのが出来上がっちゃうわけです。そこへ農村から出稼ぎにくる人がいたりする。日本占領の場合は、ちょっと微妙ですけど、日本側でははじめ水商売の人を集めて、占領に備えて大急ぎで何か接待所みたいなものを作ろうとしたじゃありませんか。そしたら、あまりに水商売の海千山千のお姉ちゃんばかりきたので、アメリカにノーサンキューと断られてしまった。出入りの業者に頼んで、鑑札でやるみたいなやり方は、アメリカは好まないんじゃないか。アメリカが外地で作戦行動をしたのは、太平洋戦争とベトナムと朝鮮戦争……。

編集部●あと、中南米への駐留とかがありますね。

瀬地山●駐留は平時で、しかもかなり長い期間滞在することが予想されるので、まわりにそういう産業が成立しやすいんだと思うんです。

橋爪●ある程度以上の人は、家族を連れていきますしね。

瀬地山●アメリカの場合は長かったので、そういうのが比較的定着しやすかった。たとえばベトナムにしても何にしても、比較的長く定着する場合には、まわりに歓楽街が自然発生的に生まれやすいというところは、一般的には言えるでしょうね。

橋爪●ただ、ベトナムは南ベトナム政府の要請によって、南ベトナム政府が南ベトナムを統治しているという前提で、米軍が入って作戦行動をしているんですね。基地があつて。だから、あれは日本軍の占領状態とはぜんぜん違う。米軍が占領しているわけじゃないんです。

瀬地山●駐留してるみたいな感じですね。

橋爪●朝鮮戦争とはだいぶ違うと思う。朝鮮戦争では、政府はほとんど機能しなくて、むしろ米軍が占領し、直接統治しているのに近い状態だったでしょう。

瀬地山●朝鮮戦争の場合は、逆に兵站基地として日本がありますから……。

橋爪●そうすると、基地とまわりの日本の歓楽街という関係になりますね。

編集部●それは、倫理の問題で考えると、等価だとは言えないですか？

橋爪●等価ではなく、そこには、個人の自由意思があるわけです。

瀬地山●それが決定的に違う点ですね。

橋爪●まったく違うと、私は思う。

瀬地山●その手の売春に、どの程度自由意思を認めるかという問題は、常にある、とくに圧倒的な貨幣価値の差を背景としたときに自由な売春と呼べるかどうかというのとはかなり疑問だとは思いますが、それでも、それでも国が関与して引っ張っていったというのとは決定的に違うというのは、そのとおりだと思いますね。

編集部●たとえばベトナム戦争のときに韓国が派兵した際には、業者が日本軍と同じように従軍慰安婦を連れて行こうと提案したことがあります。現実には、ベトナムに日本の従軍慰安婦として残っていた女の人たちが、自分たちが率先してそれを組織するからと申しでたときに、韓国軍のほうはきっぱりと拒絶しております。でも、結果として現地の女性と韓国兵との間にハーフが五千から七千人近く生まれていて、それを韓国の父親がぜんぜん認めないという問題も生まれてしまふ。そこに軍隊と性の問題というのが、自由意思かそうではないかという問題があるとしても、やはり不幸な実態をかなり生んでいるとも言えます。でも、たとえば米軍がそういうふうをやったときには、逃げた男もいるでしょうけど、アメリカ国籍を取った子どもたちもいるといった問題ともかわっていますね。そのときの、国の責任の取り方というのはどうなんでしょうか。自由意思でやったものに対して、国の責任の取り方というのはあるんでしょうか。倫理一般の問題としても。

橋爪●それは民事の問題（私人と私人との問題）ですね、全部。もちろん、国籍法の問題があるから、たとえば父親が認知しようと思っても国籍は与えないという国籍法があれば、そこに国の責任が関与してくることはあるけれど、まず民事なんじゃないですかね。その問題と日本の従軍慰安婦問題は決定的に違う。

瀬地山●違うでしょうね。やっぱり、従軍慰安婦みたいなシステムが生みだされるには、近代的な組織戦争がなければいけないわけで、それ以前はおそらく強姦という形をとっていた。要するに、戦争と性暴力というのはつながりとして必ずあるというふうには、一応置いたときに、それが現実はどういう処理のされ方をしていたかと考えると、強姦というのがいちばん原始的な形態としてあつて、それが特異な形として、非常に組織的に、国の意思によって組織されたというのが従軍慰安婦のパターンで、普通はやっぱりそれが基地ないしは駐留地周辺の歓楽街によって、少なくとも形式的に個人の意思を前提として取り引きされているというのが、だいたいの流れになるんじゃないですかね。日本の場合は、兵員管理への強い志向性から国の関与という特異な形をとったのでしょうか（表参照）。

表 戦争における（男子）戦闘員の欲望処理のパターン

媒介	個人	家族	市場	国家
形態	強姦	家族帯同	歓楽街	従軍慰安婦

その、どれがいいかなんていうことは、ほとんど意味がないと思いますが、国の意思が関与したかどうかという点で、従軍慰安婦というのが非常に特異な位置を占めるというのはそのとおりでしょうね。

編集部●それであるが故に、日本は一貫して国が関与したということを認めたがらなかったとい

うことですか。資料を突きつけられるまで、知らん顔をした。

橋爪●はい。

編集部●ということは、性の問題以前に、決定的に日本がそこにかかわったものを知らん顔して、ずっと五十年間を過ごしてきたのが大きいということでしょうか。

橋爪●それは従軍慰安婦を組織したのと同じぐらいスキャンダラスなことですよ。

戦争心理学というのがあって、戦争の本質は、市民法の下で許されないことをやっていい、むしろやらなければいけないということなのです。殺人にはじまって、いろいろなことをやるわけです。そのことがごくストレスになるのです。普通と違うわけですから。しかし、発狂したり夢をみたりしているわけではない。正常な人間として、人格の同一性を保っていないければいけないから、そのストレスのもでどういふふうなバランスを保つかというのが、戦争心理学の課題なんだと思うんです。アメリカなんかには、たくさんそういう研究がありますけど、日本の軍隊に心理学者が入ってそういう研究をしたことはないし、全部現場の裁量で経験的に処理されていたんですね。従軍慰安婦は、そういう経験的なシステムの一部分だったと思うんです。性と関係ないけど、たとえば暴力ということ言えば、都会から来て、虫も殺したことがない、すぐに音を上げるようなヒョロヒョロの二十歳前後の若者を、敵と見たら躊躇なく鉄砲を撃って突撃したりという兵隊に叩き上げるにはどうしたらいいか。これは、下士官がノウハウとして持っていて、試し斬りとかなんとかいろいろ教育プログラムのスケジュールがあって、半年か一年すると「立派な」兵隊になる。相手にすればとんでもない存在（日本鬼子）になっちゃうわけですけど。そういうプロセスの一部分に組み込まれていたということが、たぶんあるだろう

と思う。内地であれば、すべての人間は対等、という前提から始まるんですけど、そこがうまく解除されて、人間には何種類ものカテゴリーがあって、あるタイプの人間には暴力を振るっても構わないとか、今日の言い方ではマインド・コントロールに当たるとしようか、そういういろいろな刷り込みをしていくんだと思うんです。それで、自分に加わるストレスみたいなものを、暴力とかさまざまな形で発散させていくという、そういう固有の軍隊文化を作り上げていたと思うんですね。それが、科学の名で研究されるのではなく、それこそ下士官や兵隊の間に因襲的な文化として根深く染みついていったものだったと思うんです。

瀬地山●でも、そこにやっぱり朝鮮と日本の差異というものが、見事に埋め込まれているわけです。日本の内地でも朝鮮人について人間扱いをしないということが、平気で行われていたわけですから、そういう意味では、非常にやりやすい対象だったんじゃないでしょうか。

●歴史の書き直しの必要性

橋爪●そういう差別観と、日本のナショナル・アイデンティティの確立との間に深い結びつきがあったというのは、残念ながら、歴史的事実じゃないかと……。

たとえば、それぞれの国（藩）に分かれていた日本が、明治維新を期に「日本」というまとまりになります。しかしこれは、近代的な市民革命のプロセスを経てまとまったわけではない。いちばんわかりやすいのは、夷狄・対・日本というくり方だったんですね。そうすると、いわゆる欧米の夷狄、これはわかりやすい。そうすると「じゃあ韓国は何なんだ？」ということになって、たちまち征韓論というものがでてくる。そういう反応と、日本のナショナル・アイデンティ

ティの確立との結びつきがあったと思う。あの当時、韓国は独立していたわけですが、征韓論は、韓国を属国としてしまおうという、日本が悩んでいたコンプレックスの裏返しみたいなところがあるわけですよ。

そういうナショナル・アイデンティティの確立の仕方の延長上に、日韓併合もあるし、軍隊文化もあるし、この従軍慰安婦もあった。だから、従軍慰安婦をめぐる事実関係をあつめていくということは、おそらく日本の、大日本帝国のナショナル・アイデンティティの確立にもなっていて、自分と他者をどういふふう理解していったかという、そのごまかしの総決算になるだろうと予想されるわけです。

瀬地山●そこに、男性が男性であることというのも含まれていきますから、構造が二重になっている、そういう意味では非常に象徴的なテーマになるんですね。

少し話がかわりますが、先ほどの補償の問題は、お金をいくら出したから解決するという問題では、本来ないわけなんですけど、韓国やアジアの側から見ると、やっぱり今の「経済大国日本」の位置が、この補償の問題には常にかかっていると思います。つまり、あんなに金儲けをしていると。アジアから見ると、日本は、とてつもない規模の経済を持っていて、自国の給料なんてものがぜんぜん意味のないような額のお金を持っている国なんです。そんな国が、補償の額をどうのこうのとけちったり、そもそも「できない」と言ったりするので、それこそエコノミック・アニマルだというイメージを再生産してしまうわけです。

この循環をどう断ち切るかというのは、非常に難しい問題で、私は、ある意味ではどこかの段階で、とにかく思い切った、個人というのではなくてもいいですから、ある種の象徴的な補償と

いうのをしてもいいのではないかと考えています。

橋爪●もうちょっと言うと、どういふことでしょうか？ 個人補償に対する政府の言い方は、

「それをはじめるときがない」ということなわけですか。

瀬地山●ええ。「きりがなし」というか、外延が画定できないというような問題もあるんじゃないかな。

もしそういうのが技術的に難しいのであれば、その国全体に生きるような形での援助なり、補償を行うという形で、意思を表すという行為がもう少しあってもいいんじゃないかという気がするんですけどね。

少なくとも、韓国の場合は、経済摩擦の問題が常にかかっているという側面があって、そこが問題をちょっと複雑にしているなという気がするんです。

橋爪●補償に反対するわけではないんですけど、やっぱり私は、基礎は歴史だと思うんです。

瀬地山●なるほど。

橋爪●歴史には、自国の責任で自国の歴史を書いていくという部分もありますが、当然お互いからんでいるわけですから、国際間にまつわる歴史をそれぞれの国が書いていくと、そこで食い違いもでてきますよね。それが、完全に一致することはないんでしょうけれども、完全に背反しても困るわけですから、できるだけ共通の過去に向かって掘り下げられるところは掘り下げてください。歴史を共有することによって、その未来も共有できるという、共同の出発点になるわけですね。歴史が共有できなければ、繰り返し繰り返し、揉めごとは再生産されていくんじゃないかと思うんです。

現在は、日本の努力不足によって、いわゆる歴史の問題でも事実の掘り起こしが足りないし、いわゆる教育という意味の、常識的知識としての歴史についても、ほとんど何も手が打たれていないに等しくて、普通の人はごく初歩的な事実関係についても知るチャンスがない。これは、受験の過熱とか、いろんな理由があるんですけど、放置できるレベルじゃないです。もう駄目です。そのことに對して手を打つということがまず基本だろうと思います。

日本人の認識が改まるのが、韓国や中国、さまざまな東南アジアの人びとにとって、もっとも切実に願われていることだろうと思います。日本人が、過去について率直な認識をもっているというのを彼らが確信すれば、補償問題は、ある程度二義的になってくるような気もする。過去に対する認識がないのに金を持っているから、とりあえず私たちにわかる言い方で「補償」と言っているのではないかという気がします。だから、補償をするのには賛成ですけれど、その前に、歴史認識に関する問題を、これから数十年かけて、私たちは作りなおしていかなければいけないんじゃないでしょうか。

瀬地山●ドイツとポーランドの間では、ちゃんと教科書のすり合わせをやったにもかかわらず、日本と韓国の間ではぜんぜんやってないです。ぜんぜん言っていることが違います。さっき橋爪さんがおっしゃった、日本人の普通の若い人が持っている常識というのは、韓国人の普通の若い人が持っている常識と大幅にかけ離れてますし、その違いというのは絶望的なぐらいです。橋爪●平均的日本人の歴史認識は、まったくゼロに近い。中国の場合もそうです。日本人はとにかく何も知らないから話にならない。知らないということが、どれぐらい相手の反感を買うかということも知らないわけですからね。

瀬地山●自覚してないですね。ほんとにそうだと思います。

ちよつと話が逸れますが、韓国でくらしていると日本人なら、だいたい日本がどんな悪いことをしたかというのを延々と話しはじめる人と出会うわけです。そういうときに信頼関係を築くにはどうするかというと、「それ以外にもこういう悪いことをいっぱいやっている」と、こっちらどんどん言うんですよ（笑）。そうすると、少しはなかに入れて、「でも、韓国もこういう面があるでしょ」という話がやっとできるような感じです。そこまで、ぜんぜん達してないという気がします。

編集部●さっきの話ですけど、たとえば天皇制国家として一視同仁とか言いながら、それは外向きと内向きの話として使い分けていたというのがありますよね。

橋爪●全部そうですね。だから、そういうインテリの総決算をやらないといけない。それが今解決できないということは、我々の現在の社会にも同じような表向きと内向きがあるということなんです。だからそのことが扱えないんです、民主主義にせよ、学問にせよ。全部に表向きと内向きがあるから、過去の表向きと内向きも扱えないんじゃないですか。

●自らの歴史を問いたおすことが最善の道

編集部●たとえば、私どもは個別的に「従軍慰安婦」問題を丸ごと一冊ではなく、全体のなかの一つとして扱おうとしているので、今回の話が一般論に流れているくらいはありますが、私どもの立場は、個別の詳しいことは他にまかせて、この問題を取り上げるポイントとして、何がいちばん大きいかを論じようとするところに主眼があります。それは、従来の本が、「やっぱり日本

人は悪者だ」とか、「ドイツに比べて日本は」という言い方があまりにもされすぎ、ドイツが何をやったのかを深く検討もせず、ただ「ドイツはいい。それに比べて日本は……」式の物言いに終始していて、それに対して、相対化する視点というのが必要なんじゃないかと思うからです。だから、ほんとに何が悲惨なんだろうかとということやると、自由意思であるときと、国家意思が介在したときの差というのは決定的にあるんだけれども、その女性個人の問題として考えた場合は、軍隊が兵隊五十人につき一人、七十人につき一人という形で従軍慰安婦を与えていく、いわゆる為政者の発想法に、僕らはどうしても違和感を覚えるわけです。「兵隊はこうやっておけばいいんだ」というような、どこか統治の概念として民衆を捉える意識が国内的にもあったんじゃないか。

ものの本で見ると、兵隊は三十分、将校は一晚というふうに、お金は違うんですけども、そういう形で時間をとっている。そういう問題もあるんですね。だけど、意外とその問題というのは、自由意思であろうと、国家意思で強制されて連れてこられた女の人であろうと、その現場では同じではないかというような感じがあるんですね。一人の男を相手にするという点では。

瀬地山●いや、ですから強姦が起きたということと比べて、強姦と従軍慰安婦とどちらがいいかというのは、ほとんど不毛な比較だと思うんですね。従軍慰安婦のなかでやっていることもおそらく強姦です。それ自体はあまり比較をしてもしょうがないというか、そういうこと自体の問題性というのは別にあると言わざるをえないんですけども、ただ、従軍慰安婦の場合には、そこに明確な国家意思が働いているとしたら、その日本政府の責任は明確に問われるべきでしょうね。

じゃあ、強姦を野放しにしているシステムでは、国家責任を問わなくてもいいのかというと、そういう問題ではないと思いますけどね、もちろん。

編集部●でも、現実はどうだったんでしょうか。従軍慰安婦があることによって、軍当局が言っていた強姦の問題とか、あるいは性病の問題は解決されたかと言え、そんなことは一向にない。結局、軍当局の思惑は別のところにあったのではないかと、これは疑えば疑えますよね。

瀬地山●それは、当時の合理性という観点から見ただけにも、それが合理的であったかどうかという事です。

橋爪●強姦とか殺人とかはぜんぜん減らないで、むしろ奨励されましたからね。非常な数だったんじゃないでしょうか。たぶん、棲み分けてるんだと思うんですけど、従軍慰安婦が日本軍が考えたように機能したケースは、そんなに戦争が激しい状態でもなくて、駐屯地にいるみたいな任務のない状態でしょう。いったん情勢が動きましたし、またたりすると、とても従軍慰安婦が随いていける状態じゃなくなりますから、火つけ、強姦、その他あらゆるものが始まるというわけでも、従軍慰安婦がいれば強姦が防げるとかいう論理そのものが、珍妙なものであったんじゃないかと、私は思います。

編集部●輸送船に乗せずにはたたらかしてやるケースがいっぱいありますよね。そういう意味においても、日本国の責任はやっぱりあると。

瀬地山●というか、ほんとに人間だと思っただけじゃないですか。

橋爪●別な言い方をすると、責任をとるつもりじゃないわけですね。責任というのは、ここまで自分が意思している範囲だから、万一の場合は運んでこなくてはいけないうか、食糧は与えな

くってはいけないとかいう形で責任をとるじゃないですか。だけど、自分のいいように付き合うだけで、自分が責任をとる範囲のほうは、いくらでも小さくしていくわけですよ。場合によっては日本人の居留民なんかも見捨てて、軍人だけ逃げてくる。さらには、兵を見捨てて将校が逃げてくる。ケースバイケースで、どこまで切つていいようになっているわけですよ。

編集部●いずれにしても日本という国は二流の国だったなあというのを実感しますね。侵略する資格さえもなかった。これは山田風太郎さんの言葉なんですけど、その日本が侵略したというところが、結果的には大間違いだったというのが、やっぱりこの問題にも当てはまると感じざるをえませんね。

橋爪●オウムなんか見ると、兵器マニアでしょう？ 日本の軍隊もやっぱり全体のことを考えてなかったんですね。たとえば、戦艦大和があつたり、零戦があつたりすると、その技術的な性能に振り回されて、作戦計画が影響されちゃう。戦争目的も明確でないし、なんか非常に切ないものがありますよね。深刻に考えていけば……。

瀬地山●そうすると、日本はあのときに、どういうオルタナティブがあつたんでしょうね。こういうことを合理的に処理しなきゃいけないというときに、当時の合理性を前提にしたときに、当時の合理性を前提にしたら、あれは合理的だったんでしょうか。

橋爪●それは、どのレベルで考えていくかによるんですよ。石原莞爾みたいに、日米最終戦争説の人もいれば、もつとも戦争を合理的に考えるならば、アメリカの参戦を引き延ばすためにナチスの言うことを聞いてソ連に攻めこむいき方もあつた。これがもつとも合理的でしょうね。

瀬地山●いや、私の申し上げたのはその次元の話じゃなくて、従軍慰安婦の話なんです。あのシ

ステムで……。フェミニズムの立場からすれば、兵隊は放っておいたら強姦するなんて話は容認すべきでは、もちろんないのですが、さしあたり当時の合理性に従って、「兵隊は放っておいたら強姦する」ということを前提に出発したら、あれしかなかったんですかね。あとはどういうシステムが可能だったのか。アメリカ方式で、現地の歓楽街を利用させるといふシステムが、おそらくありえただけなんですけど。

編集部●その場合、日本はまさに遅れてきた帝国主義国だから余裕がない。経済的な余裕もないし、休みを取らせるといふ発想もないわけだから。そして全部管理したいというのがあつたわけだから。どちらがうまくやったかというところ……。

瀬地山●当時の合理性からいうと、合理的だったのかもしれないですね。

オウムのなかでは、オウムの行動というのは非常に合理的なわけですし、それはそれで、そうではなかったのだというところは可能だと思いますけどね。だからそれがよいとか許していいとかいうのは、まったく別の問題だと思う。むしろ、そういう合理性しか念頭に置けなかったというところで……。そういう合理性を前提にしたことの国家責任というのは、やっぱり厳しく問われるべきでしょうね。

編集部●結論としては、さっき橋爪さんがおっしゃった、自分らのやってきた歴史というものをもう一度全部トレースしなおすと、そしてそれを自己認識として深めることが必要ということが自明であるとしても敢えて言わなければならない。

瀬地山●あまりにも自明なので、それでいいのかなあと(笑)。おっしゃることは、まったくそのとおりだと思いますけど。なんか、情けなくなっちゃいますね。